

# Lib.

京都産業大学図書館報

v. 39, 増刊号 (Dec. 19, 2012)

**発表!**

## 第8回京都産業大学図書館書評大賞


入賞者発表	2
選考経過と全体講評	3
入賞作品ならびに講評	
< 大賞 >	4 - 5
< 優秀賞 >	6 - 9
< 佳作 >	10 - 19
アンケート・統計・概要	20 - 24

# 入賞者発表



第8回京都産業大学図書館書評大賞には113篇の応募があり、図書館書評大賞選考委員会で選考した結果、次の通り入賞者を決定しましたので発表します。


各賞ごと氏名の50音順



大賞		
氏名	所属・年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
しやま しょうへい 鹿山 翔平	経営学部経営学科 3年次生	メディアの大罪 テレビ、新聞はなぜ「TPP戦争」を伝えないのか 『メディアの大罪：テレビ、新聞はなぜ「TPP戦争」を伝えないのか』(三橋貴明著)



優秀賞		
氏名	所属・年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
あさま しょうご 朝間 昇吾	経済学部経済学科 3年次生	時を越え、散ることなき想い 『椿姫』(デュマ・フィス著；新庄嘉章訳)
おおつか しんたろう 大塚 慎太郎	法学部法律学科 4年次生	貞観政要 『貞観政要』(呉兢原著；原田種成著)



佳作		
氏名	所属・年次	書評タイトル 『書評対象図書』(著者名等)
あまの るみ 天野 瑠美	総合生命科学部生命資源環境学科 3年次生	美と醜のコントラスト 『さよならの空』(朱川湊人著)
いしかわ あつひろ 石川 敦啓	経営学部経営学科 3年次生	リーダーの在るべき姿 『八甲田山死の彷徨』(新田次郎著)
いわもと まり 岩本 麻梨	法学部法律学科 3年次生	忘れないで 7・18有田川水害 『昭和二八年有田川水害』(藤田崇，諏訪浩編)
きた ゆうた 喜田 悠太	経済学部経済学科 3年次生	語り継がれるべき「冒険小説」 『山猫の夏』(船戸与一著)
しんたけ はるか 新竹 はるか	法学部法律学科 3年次生	『わたしを離さないで』を読んで 『わたしを離さないで』(カズオ・イシグロ著；土屋政雄訳)

今年度、優秀賞は2名

# 選考経過と全体講評

図書館書評大賞選考委員会

図書館長 小林 武

本を読むと、楽しい。面白い。「知らなかったなあ」とか、「そうなんだよなあ」とか。こう思ったとき、書評が始まる。その気持ちを他人に伝えたいのである。でも、何故伝えたいのだろうか。面白いからとか。役に立つからとか。考えさせられるからとか。読書は、言うなれば自分と書物との対話である。そこには自分と著者との間に丁々発止としたやりとりがある。書評は、それを他人に伝える一つの形である。だから流儀がある。書評をすると、読む、書く、考える力がつく。そしてフツとした瞬間、自分が見えてくる。よくこのように言われるのは、書評の流儀を学ぶからである。図書館書評大賞は、この狙いから設けられた。

京都産業大学図書館書評大賞は、今回で8回目を迎える。7月4日に、直木賞作家の角田光代氏をお迎えして、図書館書評大賞講演会を開いた。「本の料理法 - 読むことと書くことの関係 - 」が題目である。角田氏は書評について、こう言われた。「十人いたら十通り、百人いたら百通りの読み方があると思うんですね」「『これ読みたい』って思っているなあ、と書いています」と。講演会を皮切りに、7月1日に募集を始め、9月19日に締め切った。応募総数は113篇(106名)であった。例年、ほぼ120名前後の応募者があり、今年度もそれほど変わらない。113篇のうち、重複応募や文字数などの応募条件(1600~2000字)からスクリーニングを行い、1次選考対象となった作品は、99篇であった。7篇の重複応募のほかに、7篇が文字数が超えたり少なかったりして、選考対象からはずれた。残念なことである。応募条件を満たすことも、力量を磨く上では大切なことなのである。

委員会は合計4回開かれ、2回の選考によって審査をした。1次選考に当たっては、書評大賞委員会の委員(図書館委員と図書館職員)の2名が1組になり、各自が3段階(A・B・C)で評価した。この審査に当たったの

は、合計5組10名である。1次選考の結果、28篇が2次選考として残った。2次選考は6名の図書館委員の教員と5名の職員委員が日本語の体裁、内容の要約、批評の力を柱に審査し、8篇を選んだ。大賞が1名、優秀賞が2名、佳作が5名である。

大賞は経営学部3年の鹿山翔平君で、三橋貴明著『メディアの大罪』を書評した。鹿山君は、本書から「物事を批判的かつ多面的に捉え、自分なりに論理的に解釈する必要があるということ」を学んだ。いや、学んだと言うより、実践したと言うほうがよいだろう。

「本書は確かにデータをもとに論理的な批判を展開しているものの、冒頭でも述べたように感情的な論調も多い」と指摘するのである。これは鹿山君が本書と対話をして、距離をとって考えたからであろう。批評と呼んでよい。また、優秀賞は経済学部3年の朝間昇吾君と法学部4年の大塚慎太郎君である。両君とも古典の書評である。最近、古典を読む人は減っている。両君の書評から、古典への熱い思いが伝わってくる。ただ、応募全体の傾向としては、小説・エッセイ類や実用書類の多いことが特徴である。今後、論理的思考や分析力を読書を通して鍛えてほしい。

今回、残念なことが起こった。表現の不適切さである。引用がうまく出来ず、自分の意見か他人の言葉かが分からないものがあつた。書評は、自分の意見と他人のものを区別することが大切で、書くに当たって、細心の注意が求められるのである。この点については、委員会でもさまざまな意見が出た。

この書評大賞が滞りなく行われたのは、学生諸君の熱意はもちろん、先生方がゼミなどを通じて勧めてくださったお陰である。そして忘れてならないのは、ご多忙の中、選考の労をとってくださった書評委員の先生方と図書館職員の方のご尽力である。また、丸善株式会社・株式会社紀伊國屋書店・株式会社雄松堂書店からご協賛いただいた。あらためて厚くお礼を申し上げます。

第8回 京都産業大学図書館書評大賞

経営学部 3年次生



大賞

鹿山

翔平



書名：『メディアの大罪：テレビ、新聞はなぜ「TPP 戦争」を伝えないのか』

著者：三橋貴明

出版社・出版年：PHP 研究所，2012

### 「『メディアの大罪 テレビ、新聞はなぜ「TPP 戦争」を伝えないのか』」

「マスゴミ」 - 。近年、インターネット上で広まった、現代マスメディアの低質さを皮肉る言葉である。三橋貴明著、『メディアの大罪：テレビ、新聞はなぜ「TPP 戦争」を伝えないのか』の帯には、この衝撃的な言葉が躍っていた。この帯からも想像がつく通り、本書は、近年政・財の各界においてその是非が盛んに議論される TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）問題を主軸として、現代メディアを痛烈に批判したものである。

さて、ここで「痛烈に」と述べたが、本書には筆者の感情的な表現が多分に含まれている。よって本書は TPP という経済学的な議論を土台としながらも、日頃からマスメディアへの不満を募らせる一般大衆のためのエンターテインメント的な作品という色も強い。しかしながら私は、本書を是非、大学生の「教科書」として読んでみてほしいと考える。なぜならば本書には、建設的批判能力、物事の多面的判断能力、論理的思考能力といった、大学教育を受ける者が身に付けるべき能力を身に付けるためのヒントがふんだんに散りばめられていると感じたからである。

本書は一貫して、データに裏付けられた議論を展開している。これは、筆者曰く抽象論的な報道に終始するマスメディア報道とは対を成すものである。一例を挙げよう。TPP 報道に関して、日本のマスメディアは常に「平成の開国」を強調する。すなわち、TPP に参加しなければ「世界」に後れを取り、国内不況はますます進行する、というような論調である。これは一見するともっともな議論のようであるし、加えて「日本の米の輸入関税は 700%」などと言われると、我々は納得させられざるを得ない。しかし、筆者はこのようなマスメディア報道に対し、TPP 交渉参加国および日本の平均関税率というデータをもって反論する。これによると、日本の関税率は決して高くはない。では、米の高い関税率はどうか。これについても筆者は、主要先進国の穀物自給率というデータを根拠に反論する。筆者によれば、日本の高い米の関税率は、マスメディアが批判するような農業関係者の既得権益保護のためではなく、ただでさえ低水準である穀物自給率を維持するために設定されているのだという。加えて筆者は、「平成の開国」論についても、データに基づいた批判を展開している。ここで筆者が提示したのは、2011 年の APEC において TPP 首脳会議に参加した P9 諸国および日本の名目 GDP である。これによってわかるのは、P9 諸国と日本の名目 GDP の合計を 100%とした場合、日本とアメリカだけでその 90%

を占めるということである。

このように筆者は、日本は特段国を閉ざしてはおらず、「平成の開国」を必要とせず、さらにTPPに「世界」はないということ、いずれもデータをもとに、批判的かつ多面的な視点から、論理的に主張している。これはあくまでも一例に過ぎないが、本書は首尾一貫してこのようなデータによる裏付けを重視している。

そこで本書が我々に教えてくれるのは、物事を批判的かつ多面的に捉え、自分なりに論理的に解釈する必要があるということであろう。そしてこのことは、我々大学生にとって実に有益な教訓である。なぜならば、こうしたプロセスは、まさに我々が学問研究を行う上で留意すべき事項だからである。特に私を含めた経営学部生にとっては、真っ先に教えられたプロセスではないだろうか。だからこそ私は、冒頭でも述べたように、本書を「教科書」として一読してもらいたいと考えた。本書から得られるものは、必ずや学問研究の糧となるはずである。

その上、この「教科書」には、上記のような教訓を実際に活かすための格好の「練習問題」が付いている。それは、他でもなく、本書そのものである。本書は確かにデータをもとに論理的な批判を展開しているものの、冒頭でも述べたように感情的な論調も多い。そこで本書を読み終えた際には是非、本書から得た教訓をもとに、本書を論理的に分析してみたい。それを終えた頃には、大学生として一回り成長した自分を実感できるのではないだろうか。かくいう私も、その一人である。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 総合生命科学部教員 齋藤敏之

この書評はTPPに限らず、データをもとにして、現在の日本のマスコミの在り方、その背後にあるさまざまな問題を扱っている本について述べているものである。この本を読めると、今の日本を見つめなおすための貴重な本であるといえる。改めて書評を読み直してみると、学生さんに興味をもってもらうようなスタイルで書評をまとめており、高く評価したいと思う。そして、書評者としては、この本を教科書として活用しては、とも述べている。大学で学ぶ立場からの視点として、確かに一つの取り上げ方のように感じた。書評は抑揚を抑えた比較的短い文章から構成されていることもあり、読みやすい文章に仕上がっていた。本を案内するという視点から考えても、この書評はよくできていると思う。一見すると、なにげない文章から構成されているが、平易な文章を書くことは決して簡単ではなく、予想以上に難しいことがある。労力が必要だろうと思う。書評の中で指摘されているように、この本を読んだ方には独特の読後感が残るだろうし、書評者の言葉を借りると、「一回り成長したような」印象をもつだろうと思う。著者の「いささか感情的」な文章についてはこの本を書くに至った動機を読み取ることができるとも考える。一方では、データをもとにした解説は著者ができるだけ客観的に見つめようとする姿勢の表れとも言える。世の中で起こっていることを多面的に見る、それをきちんと伝える、建設的な討論が必要である等、先の見えない、混沌とした今日を乗り越えて行くために何が必要かということ、この本を読んで思い知らされた。この本を読むことを通して、書評者は日々の授業でもっと大事にしたい事を実感している。この本と出会うきっかけはどこにあったのか。インパクトのある表題が目にとまったのかもしれないし、あるいは日頃から世の中の動きに向けている関心がそうさせたのかもしれない。読書のもつ意義を深く考えさせられる書評である。

#### 入賞者から一言



この度は、ご選出いただき誠にありがとうございます。本書評大賞へは、自らの文章能力を向上させるための良い機会だと思い応募しておりましたので、まさか大賞にご選出いただけるとは思っておらず、信じられないというのが率直な感想です。今後は、これを自信として、学業と就職活動の両立を目指していきたいと思っております。



書名：『椿姫』

著者：デュマ・フィス [著]；新庄嘉章訳

出版社・出版年：新潮社，1966

## 「時を越え、散ることなき想い」

男女が恋愛について思い悩むのは自然の摂理である。それは洋の東西を問わず、また時も選ばない。現代の日本に生きる私たちが愛するひとを想い心を痛めるように、19世紀フランスの男女も恋に胸を痛め、その苦しみを涙で濯いでいた。デュマ・フィスの手による『椿姫』を読めばそのことがよく解るだろう。

舞台は19世紀、花の都パリである。この物語の著者が、ある人物が亡くなったことでその人物の借金返済のために行われた競売に出かけるところからこの物語は始まる。その人物こそはマルグリット・ゴティエ。咲き誇るような美しさを持ち、その花を愛するがゆえに「椿姫」と呼ばれた娼婦であった。そして著者は、そこで競売にかけられたマノン・レスコーという書物を競り落とす。競売人の「(本に) なにか書き入れがあります」という言葉にどこか惹かれるところがあったからだ。無事競り落としページをめくると、そこにはこう記されていた。「マノンをマルグリットに贈る。慎み深くあれ。 アルマン・デュヴァル」

この小説は、この本の贈り主である青年アルマンとマルグリットの間に繰り広げられる悲恋物語である。その恋愛模様は著者がマノン・レスコーを競り落としたことを知り、せめてもの思い出にその本を譲ってもらおうと訪ねてきたアルマンの独白により大筋が紡がれる。そして『椿姫』という小説全体はその全てを聞きとどけた著者がまとめた、という体裁で綴られている。その裏に動く多額の金を偽りの愛が覆い隠した娼婦の世界でたくましく生きるマルグリット。純朴な青年であるアルマンとの出会いを経て真実の愛に目覚めてゆくが、当人たちではどうすることも出来ない大きな力によって二人は引き裂かれてしまう。その大きな力とは、冷酷な世間の目というものであった。この世間の目というやつは、いつの時代でも幸せな二人を放っておかないのだ。未来ある若者であるアルマンとアルマンを取り巻く世界のためには、自ら身を引くことが恋人のためであると悟ったマルグリットはその想いを隠しふたたびアルマンと出会う以前の暮らしへと戻ってゆく。この小説を論ずるにあたって、全体を構成するいくつかの点から述べていきたいと思う。まず、この物語を悲恋たらしめている大きな理由として、ヒロインであるマルグリットがすでに亡くなっているところから始まる点が挙げられる。アルマンの口から二人の出会いや二人がいかに愛し合ってゆくかが語られるわけだが、その裏には常にマルグリットの死がつきまとう。心から愛し合った二人を最後に死が別つことを知りながら二人の幸せな様子を思い浮かべるのはなんとも心苦しい。また次にこの小説の特徴として、

アルマンとマルグリットというキャラクターがそれぞれ恋愛における男女の考え方の違いをはっきりと示している、というところが挙げられるだろう。純粋に相手を愛するものの、嫉妬深く幼稚な男性らしさの象徴であるアルマン、良く言えば寛容で物事をきちんと区別し、悪く言えば心配りの足りない女性らしさの象徴であるマルグリット。まるで現代の男女を見ているかのようで、私たちに親近感を覚えさせる。物語の中でマルグリットがアルマンに言った「殿方って、聞けばいやな思いのするにきまったことを一心に聞きたがるのね」という台詞にドキッとする男性陣も少なくないだろう(私もそのひとりである)。そして最後の特徴として、先ほども述べたようにこの物語の大筋がアルマンの独白によって語られる、というところが挙げられる。終盤に死に際の際のマルグリットからアルマンにあてられた手記が登場するわけだが、それまではアルマンの主観による恋愛の様子を知ることが出来るのみで、マルグリットの心情については推察することしか出来ない。それが終盤にようやく登場したこの手記を読むことで、マルグリットの真実の想いを知ることが出来るのだ。それまでの恋愛模様を知っているからこそ、この手記の存在は非常にドラマティックな効果を持っている。

この小説の筋自体は、非常にありふれた古典的なものだ。しかし古典がなぜ古典として現代まで生き続けているかといえ、それが素晴らしいものであるからに他ならない。古いから、という理由で敬遠せずに、ぜひこういったクラシックも手に取り、楽しみ、泣いてもらいたいと思う。いつまで経ってもこの物語の美しさ・悲しさは色褪せない。そして同じくアルマンとマルグリットの想いも散ることはない。いつまでもこの本の中で椿のように美しく咲き続けるのだ。

### 選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 河合由起子

恋愛小説は男女の切ない思いに共感しつつ、幸福感に浸れるものであると定義する場合、本書は恋愛小説の枠から外れる。評者はこの点を「悩み」や「苦しみ」といった悲壮的な言葉を多用することで暗示し、また、「ある人物が亡くなったこと」から物語が始まり「二人は引き裂かれてしまう」といった結果を明示することで、結ばれるか否かは重要ではなく、その過程で起こる「人を想うが故の苦悩」を核心として本書が描いていることを印象づけている。これは書評にある「心から愛し合った二人を最後に死が別つことを知りながら二人の幸せな様子を思い浮かべるのはなんとも心苦しい」という文章からも、幸せな場面でさえも読者にその苦悩を見事に伝えている本書の特質が伺え、どのように描かれているのか興味が沸き立つ。正直、ノンフィクションを好む方であるが、書評の「主観による恋愛の様子」と「真実の想い」は、フィクションでない人間性を描いている本書の魅力を伝えており、そういった(ノンフィクションを好む)人達をも惹きつけるものがある。最後にある、タイトルの『椿姫』と結びつけた評者の美しい表現は、それまで書評で述べられた悲観的な側面から、より一層際立ったものとして心に残る。

### 入賞者から一言



この度、わたしの書評が優秀賞に選ばれたことをたいへん嬉しく思います。前々から応募したい気持ちを抱きつつ自信がなく断念していたので、今回思い切って応募してよかったです。趣味の延長で応募したようなものなのですが、賞を頂くことができて自信にもなりました。今後とも本との生活をより一層楽しめたらと思います。ありがとうございました。

第8回 京都産業大学図書館書評大賞



法学部 4年次生

大塚 慎太郎



書名：『貞観政要』

著者：[呉兢原著]；原田種成著

出版社・出版年：明治書院，1978

### 「貞観政要」

大帝国の皇帝と聞いたとき、どのような人物を思い浮かべるだろうか。臣下の箴言を聞き入れない唯我独尊的な人物を思い浮かべる人も多いと思う。確かに、世界中の皇帝と呼べる地位にいた人物を検証してみれば、そういった暗帝だとか暴君と呼ばれる人物の方が圧倒的に多い。

しかし、そうではない傑出した人物もあり、彼らは名君や賢帝といった言葉を以て後世に伝えられている。唐の二代目皇帝である太宗(在位：六二七 - 六四九)もそういった名君の一人である。

貞観政要は前述の太宗の政治にかかわる言行と、魏徵・房玄齡・杜如晦ら忠臣との問答などを、太宗の死後五十年ほどたった七世紀の後期頃に、呉兢という史家によって十巻、四十篇にまとめられた書物である。貞観とは太宗在位時の元号であり、太宗の治世は「貞観の治」と称され後世の手本となった。しかし本書が書かれた頃、唐では則天武后が権勢を誇っており政治的に極めて混乱していた。つまり本書は、呉兢をはじめとする当時の史家たちが、「安定した時世のために必要なものとは何か」を混乱した時世に伝えるための書物であるといえる。

そういった環境で書かれたこともあってか、本書は政治哲学的な要素は薄く、専ら実践的、実用的な記述が多い。そのため中国に限らず日本でも早くから大きな影響力を持ってきた。桓武天皇の治世(八〇〇年頃)には伝来していたとされるが、その後の歴代天皇をはじめとして、北条氏、足利氏、徳川氏では必読書とされ、また、道元や日蓮といった高僧も愛読していたと伝えられている。さらに『平治物語』、『源平盛衰記』、『太平記』などの軍記物にも多々引用されている。

天皇家や将軍家のお歴々が読んでいとなればさぞ難しい内容であろう、と考えるかもしれないが実際はそうではない。奢侈の禁止、讒言に対する戒め、臣下の進言がしやすい環境をつくる、などの安定した治世を作るためのきわめて基本的な事柄しか記述されていない。私はその中でも讒言に対する戒めについての文章に注目した。

洋の東西を問わず讒言は古来より多くの傑出した人物を死に追いやってきた。『戦国策』では、“遠方に出かければその間に政敵の讒言によって君主の信頼を失い、本国に帰れなくなり出奔する”という記述がある。日本においては菅原道真がその最たる例であろう。特に暴君の治世においては目を見張るほど多くの人物が讒言の犠牲になり、不当な扱いを受けた。

ところが太宗の治世において讒言によって無実の身で刑死した人物は一人もいない。では、讒言自体がなかったかといえばそうではない。前述の忠臣魏徵は高い地位にあり、また太宗に対して諫争することも多かったので、政敵から讒言されることがたびたびあったと本書に記述がある。しかし、太宗は魏徵に疑いの目を向けることなく、逆に讒言した人物を叱責したり斬刑に処したりした。讒言は現代でも多々起こりうる、きわめて解決するのが難しい問題である。



そのような機会を持つことが多かった為政者たちが、本書を愛読するようになったことも納得ができよう。

このような実践的な内容が記述されている本書ではあるが、千年以上前の書物であることから気をつけなければならない箇所も少々ある。まずは隋の二代目皇帝である煬帝との関連性についてである。中国古典では悪い例を挙げるときには伝説の親不孝者である丹朱と商均、そして暴君と名高い煬帝が頻りに登場する。注目すべきは煬帝と太宗は共に次子であり、クーデターによって兄弟を抹殺して帝位に就く等、環境や行動に類似点が多いことである。王朝の正当性のために前王朝を過剰に卑下することはよくあることであり、他にもそういった主旨の記述があることから注意して読まなければならない。

また宋代に刊刻された際、多くの文章が改悪された。このとき<sup>かちよく</sup>戈直なる人物によって校訂註釈されたとされるが、編者である原田種成氏によればこの戈直によってきわめて重大な誤脱、粗漏、恣意的な改変が行われたとされる。幸いにして日本から刊刻前の貞観政要が発見されたことと、原田氏による校正によってその部分が修正されたことで、近年は注意する必要はなくなった。しかしながら古書などを読む際には注意が必要である。

貞観政要に限らず古典の良いところは、その普遍的な部分がどんな時代になっても輝きを失わずに今日になっても重要な意味を持つことにある。しかしながら古典は長大であり、真の理解を得るためには多くの時間が必要である。大学生の間にいるいろいろな古典に触れることを私はお勧めする。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 文化学部教員 小林武

「うまいなあ」。私は大塚君の書評を読んで思った。中国古典の書評だから、なおさら嬉しくなった。今や中国古典を読む学生は数少ない。絶滅危惧種に近いのかもしれない。中国思想史を教えていて、日々、それを実感する。こんな思いの中で、『貞観政要』の書評を読んだのである。しかも大塚君の評する中国古典は、『論語』のような代表的なものではなく、『貞観政要』なのだ。今日では「通」の読み物と言えよう。

同君は、本書をこう紹介した。「貞観政要は前述の太宗の政治にかかわる言行と、魏徵・房玄齡・杜如晦ら忠臣との問答などを、太宗の死後五十年ほどたった七世紀の後期頃に、呉兢という史家によって十巻、四十篇にまとめられた書物である。」「本書は政治哲学的な要素は薄く、専ら実践的、実用的な記述が多い。そのため中国に限らず日本でも早くから大きな影響力を持ってきた。……北条氏、足利氏、徳川氏では必読書とされ、また、道元や日蓮といった高僧も愛読していたと伝えられている」と。どうです、この簡にして要を得た紹介は。

本書は、通常、帝王学の書とされている。リーダーの心得である。しかし、大塚君は讒言に注目した。告げ口をどう考えて臣下をいかに遇するか。同君は、現代でも起こり得る解決が容易ではない事例として読み解いた。古典を読んで、今を考えているのである。古典には今を考える叡智がある。その扉を開けませんか、大塚君のように。

#### 入賞者から一言



1000年以上前の古典を書評することはある種の冒険でしたが、結果として優秀賞をいただき大変うれしく思います。これを機に古典の読者が増えることを切に願っています。



佳作

あまの  
天野 瑠美

書名：『さよならの空』

著者：朱川湊人

出版社・出版年：角川書店，2005

## 「美と醜のコントラスト」

夕暮れ時、鮮やかな夕焼けに照らされながら友達と明日も遊ぶ約束をして「さよなら」をする。足元に伸びた自分の影を見つめ、「今日の夜ごはんはなんだろう。」と思いながら帰路につく。誰もが経験したことがあるだろう。古くから私たちの心を癒し、時に音楽や絵画などの芸術の題材にもされる夕焼け。その夕焼けが、この世から消えてしまうとしたら。150年後の未来まで、夕焼けと「さよなら」をしなくてはいけないとしたら。私は、あなたは、どのような行動に出るだろうか。夕焼けが消失する世界を舞台に見えてくる人間の本质とは何だろうか。

極地のオゾンホール拡大、そして世界中のいたる所で前触れもなく現れては消失するオゾンホール・通称「パエトーン・ホール」の出現を抑制するために開発された化学物質「ウェアジゾン」。国連によって世界各地でウェアジゾンを大気に散布する計画が開始されたが、ウェアジゾンには夕焼けを消してしまうという副作用があった。ウェアジゾンの効力は150年。賛否両論が飛び交う中、開発者であるテレサは日本でのウェアジゾン散布に同行する。夕焼けの消失という事実に関心をもちながら。

ウェアジゾンの副作用を知った世界は大いに荒れる。自殺することで命をもってウェアジゾンの存在を否定する人々、日本でのウェアジゾン散布を依頼した、つまり、夕焼けの消失を容認した政府に責任を問い、内閣に総辞職を迫る政治家と支持者たち。このような光景は容易に想像できる。「現実にも起こりうるのではないか。」と思わずにはいられない。そして何より、『沈黙の春』の著者であるレイチェル・カーソン女史という実在した人物とテレサの出会いが圧倒的なリアリティを醸し出しているため、自分も作中の問題に真剣に向き合わなければならない気にさせられる。

この作品には、何事も論理的に証明しようとする科学者・テレサ、「良いことをすれば天国にいる弟が幸せになれる。」という祖母の言葉を信じる善行少年・トモル、世間に対して斜に構え、アンダーグラウンドの世界を楽しむハッカー・キャラメル・ボーイ、夕焼けを奪うものに贖罪を与えんと企てる犯罪者・イエスタデーなど、十人十色の価値観を持った人々が登場するが、全員の行動原理がしっかりとした理念のもとに成り立っている。全ての登場人物の行動に筋が通っているので、たとえそれが犯罪者であっても善人であると錯覚してしまうし、読み進めるうちに誰もが本当に優しい心の持ち主であることがわかる。彼らの優しさがこの作品のキーワードである「夕焼け」の美しさと混ざり合い、「人間は美しい存在なのだ。」と思わせてくれる。

しかし、それだけでは終わらない。その美しさの中に黒い影が垣間見える。例えば、いくら優しい人だと言ってもキャラメル・ボーイやイエスタデーは犯罪者であり、世間的には悪人なのだ。テレサも過去には世間に顔向けできない間違いを犯しているし、トモルの自己犠牲的な善行は時に狂气的で、表現し難い恐怖心を読者に与える。だが、彼らは彼らだ。優しい心は変わらない。まさに作中でキャラメル・ボーイの言うとおりの「きれいなものも汚いものも、すべて呑み込んで生きていくのが人間」であり、「どっちか片方の人間なんて、この世にいるはずない」のだ。まるで闇と美しい橙色が共存する夕焼けのようだと思った。

「夕焼け」と一口に言っても、米軍基地の夕焼け、北海道の大平原の夕焼け、東京の下町の夕焼け……この作品には様々な場所の夕焼けの描写があるがそのどれもが息をのむほど美しく、人間模様に意識を奪われがちな読者にも夕焼けが消失することの切なさや名残惜しさを与えることを忘れない。

そして何より、この作品は読者を選ばない。と言うのも、この作品にはSFだけではない他のジャンルの要素も盛り込まれているからだ。テレサの生涯にわたる恋愛小説ともとれるだろうし、作中で明らかになるウェアジゾンの2つ目の副作用を思えばファンタジーという見方もできる。なおかつイエスタデーという犯罪者のおかげでサスペンスと解釈することもできる。「オゾンホール」や「フロン」など専門用語が登場するので専門外の読者には窮屈な作品かと思いきや、作中で教師が理科の授業で夕焼け消失の原理やオゾンホール発生の理由を解説するというシーンやキャラメル・ボーイがトモルに3種類の紫外線の違いについて説明するシーンを採用することで、それを専門としない読者にも理解しやすいように工夫されている。

人間とは何なのか。読者を選ばないぶん、その答えは人それぞれかもしれない。前述したキャラメル・ボーイの言葉に誰もが賛同できるという自信は私にはない。しかしはっきりと言えるのは、この作品は私たちを温かい気持ちにさせてくれるということ。「お寒い時代」と言われる現代社会。そんな中で私たちの心を優しく癒してくれる、まさに夕焼けのような作品だ。

### 選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山茂樹

一般にフィクション作品の書評をおこなうことは難しいものだと思うが、この書評は、読者の楽しみを奪うことなく的確に内容を紹介し、どのような作品であるのかについて客観性のある評価を示すことができている。その着眼点は、表題にある「美しさ」と「黒い影」の対比・共存であり、それが「人間の本质」および(対象作品の重要な主題である)「夕焼け」と重ねられて、きれいにまとめられている。

あえて難をいえば、きれいにまとまりすぎで、やや陳腐な面が感じられないでもない。とくに、上記の「まるで闇と美しい橙色が共存する夕焼けのようだ」という描写に加えて、「まさに夕焼けのような作品だ」と書評を結ぶのは、「夕焼け」の比喩を使いすぎではないか(ついそう書きたくなる気持ちもわかるけれども)。

ともあれ、感想文ではなく、書評としての客観性を志向した心意気は大いに買う。

### 入賞者から一言

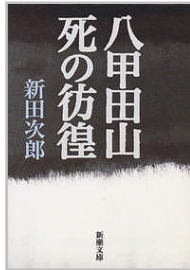


この度は私の書評を佳作に選出していただき、誠にありがとうございます。  
私がこの図書館書評大賞に応募できるのも来年度が最後になりますので、次回は佳作より上の賞を受賞できるように頑張りたいと思います。



佳作

石川 敦啓



書名：『八甲田山死の彷徨』

著者：新田次郎

出版社・出版年：新潮社，1978

## 「リーダーの在るべき姿」

明治 35 年、日露戦争当時、ロシア軍が青森に上陸してきて国道や鉄道の利用ができなくなったことを想定し、地元民でも冬の時期は絶対に踏み入れないと言われる極寒の青森・八甲田山を抜ける演習を行うことになった。この演習に抜擢されたのが、平民出身の神田大尉が率いることになる青森第 5 聯隊と士族出身の徳島大尉が率いることになる弘前第 31 聯隊で、難所八甲田山を通り抜ける同一コースを反対側からそれぞれがスタートすることになる。両者は真冬の八甲田山をどのように踏破するか、ルート、進行具合、軍編成、身仕度など、入念の準備を行った。しかし、結果は神田大尉が率いる青森第 5 聯隊は、同行していた山田少佐の無謀な指示により、最終的には 199 名の死者を出す。これとは逆に、少数精鋭とも言われた徳島大尉が率いる弘前第 31 聯隊は 210 キロ、11 日間の全行程を完全に踏破したのだった。

組織をまとめるリーダーとは、どうあるべきなのか。極寒により一歩間違えてしまえば「死」と直面する真冬の八甲田山を踏破する演習を行うなかで、リーダーの状況判断の重要さを随所に感じることができる。実際に 210 キロ、11 日間全日程を踏破した徳島大尉の弘前第 31 聯隊と 199 名の死者を出してしまった神田大尉の青森第 5 聯隊の最大の違いは、自分より上の階級の者が同行していたかどうか、である。徳島大尉は緻密な行軍日程を達成すべく、軍に直訴して軍編成もすべて自分の考える通りに遂行したことに對し、神田大尉率いる青森第 5 聯隊は、実際の演習に山田少佐が同行することになってしまった。もちろん、少佐とは大尉よりも上の身分である。この徳島大尉率いる弘前第 31 聯隊と神田大尉率いる青森第 5 聯隊のすべての違いはここにあった。実際に、なぜ神田大尉率いる青森第 5 聯隊が 199 名もの死者を出してしまったかという、現場でリーダーであるはずの神田大尉の指示よりも山田少佐の指示の方が権力を持ち、神田大尉の思い描いていたような現場での統率を、全く取ることができない、という状況に陥ってしまったからである。自分なりの、軍全体で八甲田山を踏破するための行軍日程を考えていた神田大尉に対して、名誉にばかりにすぎる山田少佐は、状況をまるで無視したような、到底厳しいだろう指示ばかりを出した。当然のごとく、どちらがリーダーで、どちらの言うことを信じれば良いのか分からなくなり、兵士たちは神田大尉や山田少佐たちに不信感を持つ。このようなリーダーの指示に不審を感じている状況では、いくら隊長が指示を出したとしても、兵士たちのモチベーションは下がる一方である。ましてや、この極寒の中の演習で、少しだけでも気を抜いてしまえば、死んでしまう。いかなる状況でもリーダーが先頭に立って、

部下を思いやった正しい状況判断ができなくては、組織はまとまりをもつことができない、ということがこのことで本当に伝わってくる。これに対して、徳島大尉率いる弘前第31聯隊は、リーダーとして自分が先頭に立って、上司に直訴してまで、自分が思い描く緻密な計画を、計画通りになるよう、自ら準備、遂行する努力をした。もちろん、神田大尉も同じように計画、準備していたが、徳島大尉の方が、計画を詰め切る勇気と責任感が強かったのだろう。どのようにすれば生き残り、行軍を損害少なく続けられるのかを想定し、そして刻々と変わりゆく状況に対応するよう、行軍中に観察を続け、良いものは直ちに取り入れる。自分よりも知識と経験のある者には出自など関係なく、信任し、権力を持たせる。そして自分の信じるものが実現できているかを絶えず検証しながら手を加えていく。つまり、その状況に合わせて常に柔軟に対応していくことも大切なのである。組織のリーダーとして、名誉に溺れることなく、常に冷静に事を分析し、各人の適材適所を見つけ、その状況に合った的確な指示を出すことこそが、組織をまとめる上で一番大切なことだということを、死と直面しながら真冬の八甲田山を踏破した徳島大尉率いる弘前第31聯隊が教えてくれる。

#### 選考委員による講評

選考委員代表 コンピュータ理工学部教員 河合由起子

判断を誤れば「死」につながるという極限の状態が起こったノンフィクション作品である本書は、読者に多様な思索を生じさせるが、評者は「組織のリーダーとしてどうあるべきか」と思案し、「あるべきリーダー像」を書評としてしっかり描くことができている。また、評者の主張が明確な点だけでなく、書評の構成も魅力的である。本書では「勝者」について先に描写されているにも関わらず、書評では読者がより興味ある「敗者」について先に論じている。そこでは、死に至らしめる程の「状況をまるで無視したような、到底厳しいだろう指示」とはどういったものだったのか、「いかなる状況でもリーダーが先頭に立って、部下を思いやった正しい状況判断ができなくては、組織はまとまりをもつことができない」と至らしめた内容はどのようなものだったのか、本書に対する興味が自然と湧いてくる。最後に締め括られているように、勝者と敗者を対比することで評者が「教わったもの」が強く伝わる書評である。

#### 入賞者から一言



書を評す。その本を読んで自分は何を感じ、作者のどんな意図をくみ取ることができるのか。感じることは人それぞれ違いますが、大切なことは自分の頭の中で思考をめぐらせ、どういった経緯でその結論になったか、だと思います。一般に言う、「結果よりも内容」です。パソコンや携帯電話など、技術の発展が著しく、「考える」ことが減ってしまっている現代、書評を書くことによってふと立ち止まることのできたように思います。



佳作

いわもと  
まり  
岩本 麻梨

書名：『昭和二八年有田川水害』

著者：藤田崇，諏訪浩編

出版社・出版年：古今書院，2006

## 「忘れないで 7・18有田川水害」

私がふと図書館の歴史コーナーを歩いていた時、本書に出会った。本書を一目見た時、不思議と地元の旧友に会ったような懐かしい感情が湧いた。本書で登場する昭和二八年有田川水害は小学生の頃、授業で調べていたことがあったからだろう。それから十年ぐらい経った今、本書は忘れかかった災害の記憶を呼び覚まし、上流地域の甚大な被害を私に伝えに来た。

「君たちはここでどんな恐ろしいことが起こったか、知っているか。ここではものすごい恐ろしいことが起こったんじゃ」

平成十六年九月八日午後、著者五人が明治二二年十津川水害の研究のため現地調査に出向いた際、花園村（現かつらぎ町花園）北寺に立ち寄り、紀州大水害記念碑を見ていた。その時に、水害の生存者である大西兵衛さんにこう声を掛けられた。

これが、本書が執筆されるきっかけとなった。筆者ら五人は大西さんの話を聞くうちに有田川水害、とりわけ金剛寺や北寺の崩壊災害の重要性を再認識し、斜面災害を中心に本書にまとめた。本書では、八つの章に分かれて有田川水害の斜面災害について載せられている。花園村の概要、地質から見た有田川水害の実態、当時の気象、有田川水害、それによる斜面災害、生存者が語る山崩れの恐怖、突如出現した天然ダム（地すべりダム）、そしてその後の復興といった順序でまとめられている。

本書では生存者へのインタビューや、生存者が残した記録や文集が多くを占める。これは本書の主役が花園村の人々、とくに被災者であるためだ。この章は昔のこの地方の方言や当時の地名が登場する。同じ和歌山県民である私にとって、耳にしたことのある言葉や私が住んでいた地域についても出てきた。そのせいか、まるで乾いた土に水が沁み込むかのように私の頭の中に入っていった。しかし、この章はだれが見ても、水害による山崩れの恐ろしさについてよく分かる。特に、この言葉にはその恐ろしさが詰まっている。

「おれ、死ぬと思った」

この言葉は災害に遭った中学生の詩のタイトルだ。この言葉から始まったこの章は自然の猛威、人々の生への渴望が描かれている。本書では梁瀬、北寺、新子区、久木区といった山崩れの被害が大きかった地域に絞り、残された多くの記録や文集を少し加筆しながら載せられた。私はこの章を読んでいくと当時の悲惨な状況、災害への対応について考えさせられた。

この水害が起こったのは戦後すぐ。日本はまだアメリカを始めとする連合国軍の占領下にい

た。この水害が起こった際、当時編成されて間もない警察予備隊（後の自衛隊）と連合軍の部隊が被災者の救助にあっていた。しかし、山崩れで孤立した被災地に行くにはヘリしかなく食料を届けるので精いっぱいだったのだろう。水害後の遺体の確認や埋葬は同郷の生存者によって行なわれた。この章の記録には、水害の恐怖とともに遺体の確認や埋葬を行なったことが記されている。山崩れは土砂や家が押し流し、人を巻き込みまるでミキサーのようにバラバラにしていく。遺体の中には肢体が欠如し、無残な姿で発見されることがあった。改めて、私は自然の恐ろしさに気付かされた。

遺体の確認を行なった生存者は当時遺体を見て、悲しさや寂しさを通り越し、涙もでなかったという。通常であるなら到底耐えられないだろう。しかし、誰かはしなければならぬ仕事だった。著者ら五人に声を掛けた大西さんも人間的感情を自然と抑え、確認したそうだ。まだ大きな災害に遭ったことのない私にとって、この水害がどれだけ悲惨なものか考えさせられ、読むたびに目頭が熱くなった。

東北地方太平洋沖地震や平成二三年の台風 12 号による豪雨など、昨今では災害に対し意識が高まっている。その中で、私は偶然本書と巡り合った。おかげで、有田川水害とりわけ上流域の被害や当時の災害への対応について知ることができた。後付けになるかもしれないが、もしかしたらこの水害を後世に伝えていって欲しいという被災者の思いが私を本書に出会わせたと思ふ。

**選考委員による講評**

**選考委員代表 外国語学部教員 渡辺史央**

評者は昭和 28 年に起こった自身の出身地、和歌山県の有田川水害を取り上げた本書に巡り会うべくして出会い、小学校時代に得た知識や感情とは違った強い何かを得たのかもしれない。それは、本書に出てくる生存者の語る同郷の言葉の一言一言が「まるで乾いた土に水が沁み込むかのように私の頭の中に入っていった」という表現に端的に表れています。自然の猛威、それは誰もが経験するものではない。だからこそ、遭遇した人から学び傳承されていかなければならないことがたくさんあるのだと言えます。人々の多くの声のなかで評者の心に留まった「おれ、死ぬと思った」という言葉は、目の前に立ちだかる自然の猛威への恐怖を凝縮するものであったのでしょうか。この書評の少し残念なところは、自然災害の恐ろしさ、悲惨さを論じ、それについての個人的な心情に終始していて、本書が伝えたいその先にある「何か」を評しきれていなかった点です。自然災害が、自然への畏敬の念を忘れかけている人間社会（我々）への自然からの問題提起、警鐘である、ということにも言及があればなおよかったと思います。

**入賞者から一言**



受賞を知った時はうれしさより驚きの方が大きかったです。なにぶん初めて、書評を書いたので賞を頂くとは思ってもみませんでした。これを機会に、より多くの本を読んで、また書評大賞に応募したいと思います。



佳作

喜田 悠太



書名：『山猫の夏』

著者：船戸与一

出版社・出版年：講談社，1995

## 「語り継がれるべき「冒険小説」」

「ここじゃ何を飲ませる？喉もこころも乾ききっているんだが」 この作品、『山猫の夏』の中心人物である 山猫 こと弓削一徳が登場後初めて口にするセリフだ。舞台となるのは過酷な暑さのブラジル東北部、人口は二千と少し、バスは週に一度しか通らないような陸の孤島エクルウ。主人公である おれ は日本人であり、物語の7年前にブラジルへ伯父を頼りに渡ってきている。しばらくして伯父は病に倒れてしまっているが、その後このエクルウの町へ伯父の妻であり主人公の義理の伯母にあたるマイ・マリアが経営する食堂 蜘蛛の巣 へ身を寄せ、併設する酒房のマスターの真似事をして日々を過ごしていた。そこへ突然現れたのがこの男、山猫である。前述したようにここエクルウは過酷な暑さなわけだが、それにも関わらず真っ黒なタキシードに身を包んでいるなど、完全にこの町とは異質な存在として描かれている。ただ服装が異質というだけではなく、その場で絡んできたならず者をあっという間に叩きのめしてしまったり、同じ日本人である主人公が舌を巻くほどの完璧な「ブラジル語」を操ってみせるなど(主人公が操るのは所詮学んだポルトガル語である)その非凡さは徹底しているのだ。

先ほど絡んできたならず者について書いたが、作品を語るにあたり重要な点なので詳しく説明しておく、このエクルウはビーステルフェルト家とアンドラーデ家という資産家の一族たちに支配されており、長い間互いに対立し合い殺し合いがたびたび行われている。警察や軍隊もいるのだが完全に腐敗しきっており、いかに漁夫の利を得るかにしか興味がなく、機能していない。また町の人々も両家の対立による利益を享受して生活しており、まさにこの町は均衡する両家に対立することによって成り立っているのである。そして、先ほどのならず者というのはビーステルフェルト家の郎党であり、山猫はその男を叩きのめしたのち、当主に招かれた山猫がやってきたと伝える、と高らかに宣言するわけである。そう、山猫はビーステルフェルトにある依頼をされてこの町にやってきたのだ。そして山猫が主人公に札束と拳銃を押しつけ、自らの助手として雇いたいと申し出るところからこの長い物語は幕を開けることになる……。

さて、この小説そのものについて触れておくと、『山猫の夏』という作品は船戸与一により1995年に発表された冒険小説である。しかし恥ずかしながら、私はこの小説を読むまで冒険小説というものに触れたことがなかった。冒険小説というからには宝の地図が出てきたり、船に乗って航海したりするのかななどと考えていたわけだが、実際はそういったものではない。強いて言うならば冒険小説とはもっとハードボイルドであり、アルコールと硝煙、そして血の臭



いがページの間隙や言葉の端々からぶんと漂ってくるような一種男臭いものだ。その男臭さはこの物語の舞台であるブラジルに吹く風のように乾いており、いっそ爽やかささえ感じさせる。もちろん殺し合いが起こるわけなのだが、そこにも陰湿さは感じられず、どこまでもさらっと読ませるのがこの小説の不思議さだ。そしてこの小説のもう一つの特徴は、主人公が物語の経過に従い山猫に影響され成長してゆく、すなわちビルドゥングスロマンの手法が用いられているというところだろう。開始当初と後半における主人公の人間性の変化というものにも注意して読んでいただきたいと思う。この山猫というミステリアスな男には人を変えてしまう不思議な魅力があり、それもまたこの作品の魅力であるといえる。次第に紐解かれる山猫の過去もまた興味深い。そして山猫だけでなく、この作品に登場する人物はどれもこれも一癖ある連中ばかりで(当然ろくでもない人物もいるわけだが……) そのどれもが生き生きとしており、小さな町に起こる大騒動を盛り上げてゆく。これらの要素が700ページ余に及ぶこの大作を作り上げていくわけだが、ともすれば複雑になりそうな設定や多数の登場人物を綺麗にまとめあげているのは素晴らしく、良い意味で長さを感じさせない。

最後になるが、この物語の中で登場人物がよく口にする飲み物にカイピリングというものがある。一般的にカイピリーニャと呼ばれるこのカクテルは、氷で満たしたグラスにブラジルの大衆酒・ピングアと砂糖、それからライムをたっぷりを入れて飲むものなのだが、この小説を読む際にはぜひこのカクテルをお供にしていいただきたい。こいつをちびりちびりとやりながら読んでこそ、この物語の雰囲気を感じるといえる。かくいう私も、いまカイピリングを飲みながらキーボードを叩いている。もちろん、砂糖抜き・ライム多めの山猫流カイピリングだ。……どうやら私も山猫に影響されてしまった一人であるらしい。

### 選考委員による講評

選考委員代表 外国語学部教員 渡辺史央

この書評の第一印象として、まず作品の持つ空気感を上手く文章で表現しているなと感心しました。私自身、ハードボイルドが前面に押し出されたようなこの手の作品には全く触れたことがなく、恐らくこのような機会がなければ手に取ることもなかったと思いますが、この書評には私のような人にも作品の魅力が十分に伝えられていると思います。「山猫」のミステリアスな部分は決して明かさず、登場人物や繰り広げられるストーリーの紹介の仕方にも高い技術を感じました。そして、作品全体を客観的にとらえ、作品の構成にも批評を与えつつ、最後には舞台となったブラジルの雰囲気を伝えるための工夫も施されています。何より、評者の大作を読み終えた充実感が伝わっていて、思わず作品の感動を共感したいと思わせるような文の書き方がこのような評価につながったと思います。

### 入賞者から一言



このような拙文に佳作という評価を頂き、ありがとうございます。それも恐らくは作品自体が持つ魅力のおかげでしょう。この書評を読んで下さった方が少しでも多く『山猫の夏』という素晴らしい小説を手にとられることを期待しています。来年もぜひ書評大賞に応募させていただきたいと思います。



## 佳作

しんたけ  
 新竹 はるか


書名：『わたしを離さないで』

著者：カズオ・イシグロ著；土屋政雄訳

出版社・出版年：早川書房，2006

「『わたしを離さないで』を読んで」

「あなた方の人生はもう決まっています。これから大人になっていきますが、あなた方に老年はありません。いえ、中年もあるかどうか……。いずれ臓器提供が始まります。あなた方はそのために作られた存在で、提供が使命です。」ルーシー先生はそう淡々と告げた。

この小説は、介護人の仕事をしているキャシーが自己の過去を振り返るところから始まる。彼女が過ごしたヘールシャムという寄宿学校には、穏やかな生活の裏に残酷な現実が隠されていた。そして、物語を読み進めるにつれ胸を抉られるような真実に近づいていく。

主人公のキャシーは、観察力に長けた人物で、他人と自分の間に明確な境界線を敷いている優秀な介護人である。作品は全て彼女の視点で描かれている。

現代では、医療技術の進歩により昔では治らなかった病気が治るようになった。しかし、全ての病気の治療法が進歩したわけではなく、臓器提供しか治療法がない病気も存在している。この小説は、そんな現代をより利己的にした社会が舞台となっている。施設で育った子ども達は提供をするために作られた命であり、それ以外に存在する意味はない。提供は1回では終わらず、提供者が死ぬまで続いていく。提供者以外の人間は、彼らの人権を尊重したりしない。そんな社会から施設の子供達を守ろうとした大人達も最後には守りきれずに自分の無力さを痛感していく。

物語のなかでキャシーは知り合いの介護人からルースの話聞き、まずルースに会いに行く。ルースはとても激しい性格で少し自己中心的な考え方をするところがあるが、本来はとても優しい心を持った人物である。キャシーとルースが再会したときルースは1回目の提供を終えた後だった。ルースとの懐かしい会話の中でトミーの話題が出てくる。

トミーは、芸術的なセンスと強靱な精神力を兼ね備えた人物であったが、ヘールシャムにいた頃は其の性格ゆえのトラブルを起こすことがよくあった。キャシーとルースがトミーに会いに行ったとき、トミーは2回目の提供を終えていた。ルースはキャシーにある懺悔をし、自分が成し遂げられなかったことをトミーと2人で成し遂げてほしいと希望を託す。

ルースからもらった最後の希望である提供の猶予を申請する為にトミーとキャシーはヘールシャムの施設にいたマダムに会いに行くが、マダムの家には2人がよく知っているエミリ先生もいた。そこで2人はマダムとエミリ先生から提供には猶予は存在しないこと、展示会の持つ真の意味について教えられ、運命の残酷さを知る。

私は、最後まで救済されない物語をあまり読んだことが無いが、この作品は今まで読んだものの中でも読んだ後に残る余韻が強い作品であると思う。冒頭で書いたルーシー先生の発言の続きに、見苦しい人生を送ってほしくないという言葉があったが、将来を決められた子ども達が、束の間でも自分の将来に思いをはせることは見苦しい行為であったのだろうか。私がキャシー達と同じ立場だったら、何を考え、どう行動するだろう。

著者のカズオ・イシグロは幼少時に日本からイギリスへ渡り、その著書には日本とイギリスの両方の文化を持っていることで生まれる独特の世界観が滲み出てきている。著者は、作品を通して自分が何者か、自由に人生を決められるということがどういうことかを、私達に投げかけているのではないか。少なくとも私はそう思う。キャシーが過去を回想する場面では、人物像が詳細に描かれていて、彼女の視点から周りの大人達に対する疑念やトミーやルースに対する思いが多くの言葉で表現されている。

カズオ・イシグロの作品は、一見すると硬質な文章に思えるが、読み深めていくうちに硬質ではなく、主人公の視点から描かれていることによって、読者側に入りやすい文章となり、作品の世界観に入り込んでしまっている自分に気づく。作品の余韻が強すぎて、読んだ後この作品がフィクションであるにもかかわらず、実話であるかのように重くのしかかってくるが、長い人生の中で1回は読んでおきたい作品である。

これを読んでいるあなたも自分が何者で、自由に人生を決められるということがどういうことかを考えてほしいと心から思う。

### 選考委員による講評

選考委員代表 法務研究科教員 中山茂樹

『わたしを離さないで』の書評はきわめて難しい作業であろう。何か内容を少しでも語ると、未読の者がこの繊細な作品を読み進む楽しみを奪ってしまうように思われるからだ。実をいえば、わたしは、当初、選考委員の中でこの書評に最も厳しい評価を与えた者のひとりである。その理由のひとつは、書評中のいくつかの記述(それを具体的に示すことは避けた)が、上記の楽しみを奪う点で書評として致命的であると考えたからである。書評者は、それを語っても問題は少ないと判断したのである(個人的にはわたしは賛成できないが、そのような判断がありうることは認める)。

書評者の人生において対象作品が大きな意味をもち、ほかの人にも読むことを勧めたい気持ちが伝わる文章である。作品内容をある程度語ることによって、この書評は、対象作品を読んでみたいと思わせる力を獲得している。そのぎりぎりの判断に敬意を表したい。

### 入賞者から一言



今回、私の作品が佳作に入賞し本当に嬉しいです。まさか入賞できるとは思わなかったのですが、いい思い出になりました。最初は応募すること自体迷っていましたが、応募してよかったです。これからもこれを励みに頑張っていきたいと思えます。

## 第8回 京都産業大学図書館書評大賞アンケートから

書評の応募時にアンケートにご回答いただきました。ご協力ありがとうございました。  
その一部をご紹介します。

### Q1) なぜ「書評大賞」に応募されたのですか。動機をお聞かせください。

ゼミ等の課題・教員からの推薦。

何か作品を一つ仕上げる、ということはこの夏にやりたかったから。

前々から興味があり、一度応募したいと思っていたから。

本を探すのに書評大賞の作品を参考にしているうちに自分でも書いてみたくなった。

とても素晴らしい本を読んだのに、その本があまり人々に読まれておらず、自分が書評を書くことによって、多くの人に読まれることになればとても素敵だと考えたため。

普段読書をあまりしないので、この機会に本を読んで、書評という形に残そうと思ったから。

一冊の本に向き合う良い機会になると思い、今回応募させていただいた。

読書が好きで読んでいたのだが、好きを生かすということはどういうことか知りたく、今回応募した。

学生のうちに何か一つでもやり遂げたいと思ったから。

前回落選し、今回こそは受賞してこの作品をより多くの人に知ってもらいたいから。

### Q2) 書評の対象図書をどのようにして選びましたか。(最もあてはまるもの1つ)

興味のある分野だから (41人)

先生からの推薦・指示 (19人)

好きな作家だから (14人)

図書館で見つけたから (14人)

話題の本だから (4人)

その他 (6人)



### Q3) 次回も応募してみたいと思いますか。

「はい。」(56人)(理由)

文章を書き上げるということに達成感を感じたので。

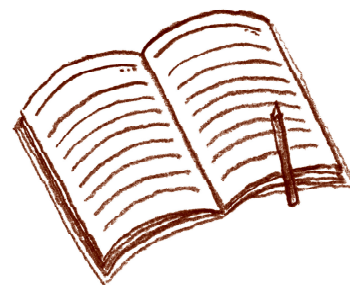
本を読むだけでなく、文章にすることでいろいろな見方ができるため。

自分が本と人の橋渡しになれることは素敵だと考えるから。

作品を読んで、実際にその本について考える良い機会となるから。



読解力と文章力を磨く良い機会だと思うから。  
書いてみて面白かったから。  
文字に起こしてみることで行間を読むことができたから。  
まだまだ書きたい本がたくさんあるので。



「いいえ。」(37人)(理由)

卒業するから。  
書評を書くのは難しく、大変だったから。

**Q4) 執筆してみたの感想や、提出方法など、お気づきの点を自由にご記入ください。**

本を何度も読むことによってしっかり内容が頭の中に入り本をきちんと読む機会になった。  
執筆してみて他人を読む気にさせる事の必要性が分かった。  
自分としては言いたいことを書けた。  
提出方法が少しややこしかった。  
限られた文字数で文章を作るのは難しく、なかなかまとめることができなかった。  
違う見方で本を評価するのは難しかった。  
文章を書くことの大変さが身に染みて感じられた。しかし、読書後のその本の整理を頭の中から文章に変換する作業をすることで、本当の理解に繋がることも分かった。  
自分の考えを改める時間を持つ、さらに客観的に評価して下さるので、とても勉強になる。  
久しぶりに読書をして、読書の楽しさを思い出せてよかった。  
いい経験になったと思う。自分の言葉で作品を表現することがいかに難しいことかわかった。  
伝えたいことが多すぎて、2000字以内にまとめるのがとても難しかった。  
一冊の本を読むことでたくさん気づいたことがあった。今の自分に足りないものが見つかった。大学生生活を無駄にすることなく過ごそうと思わせてくれる本だった。

**Q5) 毎年「書評大賞講演会」を開催しています。今後の講演会に期待する内容・講師などのご希望がありましたらお書きください。**

評論家の方などに少し書き方を教わりたい。  
希望する講演会講師  
小野不由美・あさのあつこ・有川浩・乙一・綿矢りさ・森見登美彦・桜庭一樹・綾辻行人  
佐藤友哉・新堂冬樹・いしいしんじ・道尾秀介・東野圭吾・赤川次郎

# 第8回 京都産業大学図書館書評大賞 統計

## 1. 学部別応募者数

今回は全体で106名の学部学生からの応募がありました。ここ数年は、応募者数が百十数名程度で推移しており、図書館書評大賞も8回を数え定着したのではないかと思います。

応募者の所属学部別では、経営学部からの応募が41名と最も多く、次いで法学部の26名・文化学部17名という順でしたが、例年これらの学部からの応募が多いというのが実情です。今回は、外国語学部からの応募が過去と比較し、大幅に増加しました。また、例年、経済学部、そして、理学部・工学部・コンピュータ理工学部・総合生命科学部といった理系学部からの応募が少ない状況です。

書評対象図書分野は問いません。みなさん、今後ともどうぞ積極的に応募してください。

## 2. 対象図書の分野別作品数

例年、「文学」分野図書での書評が圧倒的に多く、今年も106名の応募者のうち約半数の56名がこの分野を対象図書としました。なお、この「文学」分野では、古典的名著から山崎豊子・有川浩・東野圭吾など人気作家作品など幅広く取り上げられているのが特徴です。次に多いのが「社会科学」分野の18篇となりました。3番目に多いのが、「芸術・美術」分野の13篇でしたが、より詳細に対象図書を分析したところ、13篇のうち9篇が、野球やサッカー・ゴルフといったスポーツに関する書評でした。

このように、対象図書は多岐にわたり、またアンケートでも「自分が書評を書くことによって、多くの人に読まれることになればとても素敵だと考えたため。」という回答があるように、人に薦めたい本についての力作が目立ちました。毎年膨大な数の図書が出版されます。一冊の本との出会いはまさに一期一会。次回も書評をきっかけにみなさんが新しい本と出会えますように、たくさんのご応募をお待ちしています。

## 3. 学年別応募者数

第8回の学年別応募者数は2年次生50名、3年次生38名、4年次生15名、1年次生3名の順となりました。例年割合としてはほぼ同じ状況で、1年次生からの応募が少ないのが残念です。

対象とする作品を選び、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えていく書評作業は、みなさんの読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させることができます。応募者のアンケートでも「読解力と文章力を磨く良い機会だから」という理由での応募がありますが、1年次生から積極的に挑戦され、年々レベルアップしていかれることを願っています。

## 書評執筆の参考にいかがですか？

### 『快樂としての読書』日本篇、海外篇

丸谷オ一著、筑摩書房、2012 (019.9::MAR 2階 - 文庫)

### 『思い出のブックカフェ：巽孝之書評集成』

巽孝之著、研究社、2009 (019.9::TAT 2階)

### 『打ちのめされるようなすごい本』

米原万里著、文藝春秋、2006 (019.9::YON 2階)

### 『蝶々は誰からの手紙』

丸谷オ一著、マガジンハウス、2008 (019.9::MAR 2階)

### 『愉快的本と立派な本：毎日新聞「今週の本棚」20年名作選』

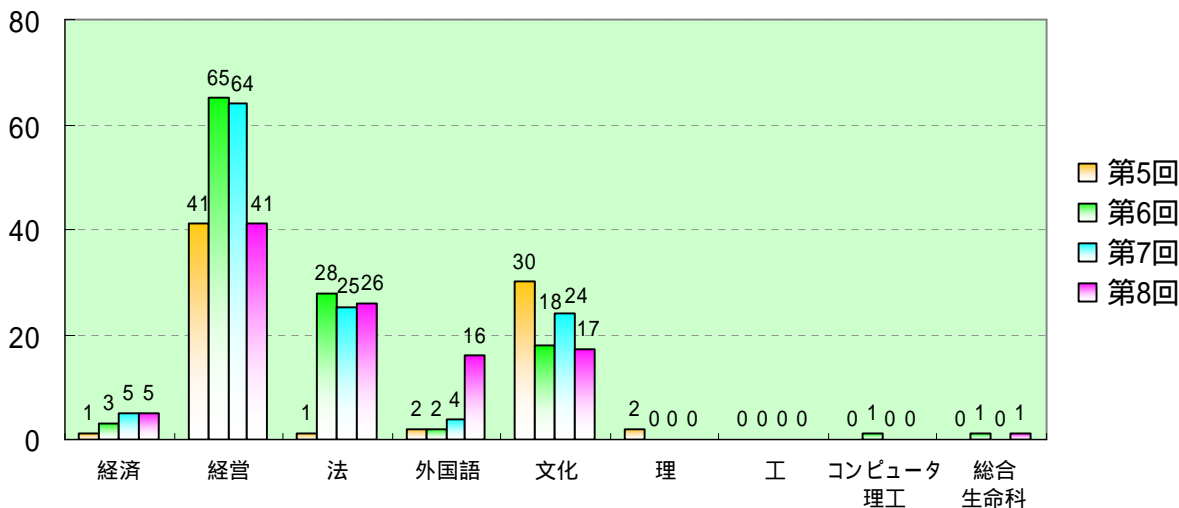
丸谷オ一・池澤夏樹編、毎日新聞社、2012 (019.9::MAR::1992/1997 2階)

### 『大好きな本：川上弘美[書評集]』

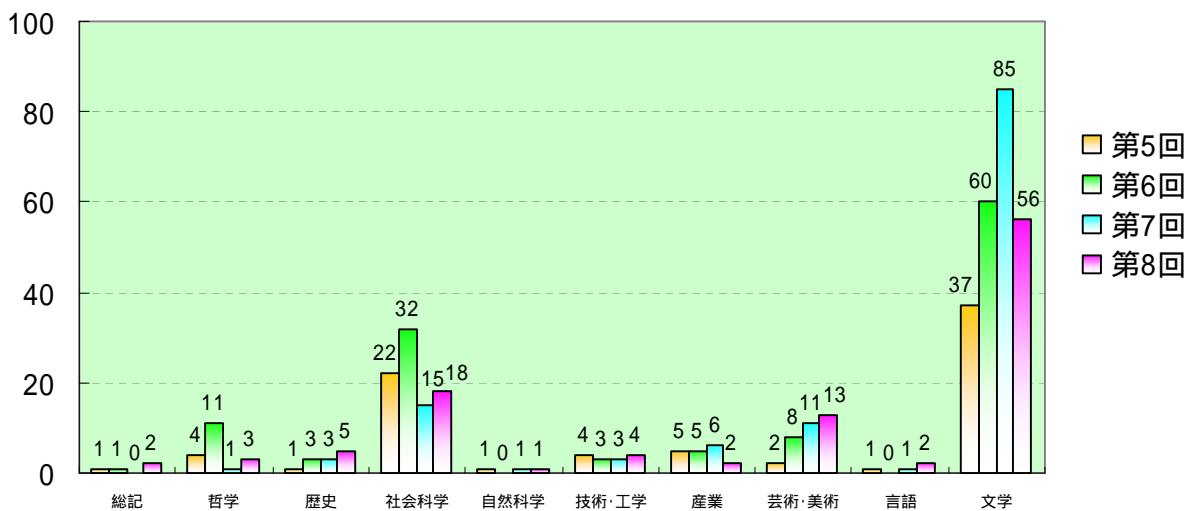
川上弘美著、朝日新聞社、2007 (019.9::KAW 2階)



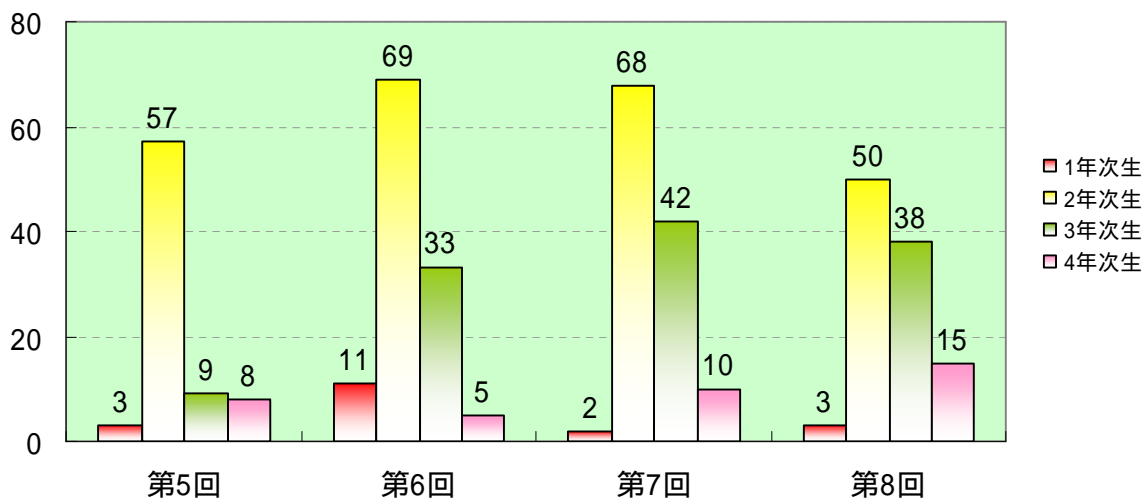
### 1. 学部別応募者数



### 2. 対象図書分野別作品数



### 3. 学年別応募者数



## 目的

- (1) 学生同士が本を推薦することでお互いに刺激を受け、読書活動が推進され、結果として図書館利用を促進する。
- (2) 興味ある著作を読みこなし、内容を簡潔にまとめながら論理的な批評を加えてゆく書評作業は、図書館を利用する学生の読解力や論理的思考能力、文章表現能力を向上させ、レポート・論文作成能力、情報活用能力を育成する有効な手段となる。

## 応募要領（抜粋）

1. 応募資格 京都産業大学の学部学生
2. 応募要件
  - (1) 本学図書館所蔵図書を対象図書とする。
  - (2) 文字数：1 篇につき 1,600 字以上 2,000 字以内。原稿はマイクロソフト社の Word を使用して作成すること。
  - (3) 応募作品は本人のオリジナルであること。（盗用厳禁）
  - (4) その他：1 人複数篇の応募可。ただし入賞は 1 人 1 篇。応募作品の著作権は京都産業大学に帰属する。

## 応募総数

106名113篇

## 実施日程

応募期間 平成24年 7月1日(日)～9月19日(水)  
入選発表 平成24年 11月30日(金)  
表彰式 平成24年 12月19日(水)

## 選考委員より 一言

Kindleなどで電子書籍閲覧の機会が増え、書評をこれまでよりも注意深く読むようになりました。今回、多くの書評に触れましたが、「手に取って読むことで核心に触られる」という書き方が良い（読みたくなる）評価であったと思います。（河合）

書評の難しさを今回もつくづく感じました。今はいろいろな文章をネットで見ることはできますが、ぜひ、自分の言葉で文章を書くことをお勧めします。書評大賞へ応募することはそのための良い機会だと思います。（齋藤）

大変残念なことですが、他人の表現を借りていると思われる書評に触れました。ウェブで書評に触れる機会も多く、自分の表現と他人の表現の区別が曖昧となってしまうのも一因でしょうが、一文でも不適切なものは剽窃・盗作・ばくりです。（寺井）

書評は、自分と対象書との間に距離をとらなければなりません。また、自分の言葉と他者（対象書を含む）の言葉とが、読者に区別できる表現でなければなりません。そういうことがふつうにできるようにすることが大学教育というものでしょうか。（中山）

一度にこれだけ多くの書評を読んだことは今までなく、普段は触れることのない作品にも出会うことができ、非常に貴重な機会でした。人がそれを読んで思わず手に取りたくなる、そんな作品のもつ魅力をいかにわかりやすく「自分の言葉」で表現できるか、といった創意工夫をすることが書評を書く醍醐味なのは、と思いました。（渡辺）

応募された書評を読んでも、期待していた「読み手に本を読む気を起こさせる」作品が多く、選考に苦心しました。惜しくも入賞を逃した人、今回は応募を見送った人も含め、来年もチャレンジしてください。（天笠）

「この本を読んでよかった！」という感動や、「他の人にもぜひ読んでほしい！」という熱い思いを、他人の言葉を借りるのではなく、そのまま素直に自分の言葉で紡いでほしいと思います。（今井）

応募作の中に、本が出版された時代や著者の生い立ちについて調べて書いた書評がありました。知ることで本への理解が深まります。ほかの本や雑誌で調べたことを書くときは、出典の明示や引用のしかたに気をつけましょう。（近江）

「課題で書かされている」と「好きで楽しんで書いている」という気持ちが文章で伝わるように感じました。ただの内容のまとめである作品もありましたが、本を読んでどんなことが得られたかを書いている作品は、読みたい気持ちにさせられました。（菊池）

ケータイの影響か、長い「日本語」に慣れていないように見えます。メールのような文章から脱却するためには活字を読むことが大切。読み慣れれば必ず書きたくなります。さあ、まずは1冊！図書館はいつも応援中です。（澤熊）